

【書評】

鳥羽美鈴著

『多様性のなかのフランス語——フランコフォニーについて考える』 関西学院大学出版会、2012年

Toba Misuzu,

Le français dans la diversité : réfléchir sur la francophonie,

Presses de l'Université Kwansai-Gakuin, 2012.

長谷川 秀樹

HASEGAWA Hideki

近年、フランス語教育において「フランス語圏」あるいは「フランコフォニー」という言葉を頻繁に見聞する。フランス語の入門テキストなど語学書もその取り上げる内容がバリやフランスよりは、フランス語圏／フランコフォニーというものが多くなっている。フランス語教育においてフランス語圏やフランコフォニーは一種の「流行」なのかもしれない。評者なりにこの「流行」を分析するに、「じり貧」となっているフランス語教育の「打開策」として、フランス語圏やフランコフォニーが用いられていると考えられる。ただ、フランス語圏やフランコフォニーを表面的、あるいは断片的に教育題材に使ったところで、「打開策」になりえるのかどうか疑問に思う。フランス語圏やフランコフォニーについての「理解」が重要となってくるのだが、フランスに長期留学しフランス語に長けていても、1週間程度観光がてらにそれ以外のフランス語圏を旅行しただけでフランス語圏やフランコフォニーを「理解」したことにはならない。

そうしたなか、日本におけるフランコフォニー研究書としては初めてと言える『多様性の中のフランス語——フランコフォニーについて考える』が刊行された。

まず、著者の経歴とフランコフォニーとのかかわりについて概説する。鳥羽美鈴氏は早稲田大学第1文学部にてフランス古典演劇を学んだ後、数年間外資系企業での勤務を経て、一橋大学大学院言語社会研究科に進学してフランコフォニー研究を始める。その後、同研究科で博士学位を取得し、関西学院大学の現職に就いているが、この10数年間フランコフォニー研究を続け

てきた第一人者である。本書は大学院の修士論文および博士論文を含み、さらにそれを発展させた本格的なフランコフォニー／フランス語圏研究書である。

さて、本書の構成について概説する。第1章は他章に比べてかなり短いものの、英語圏やスペイン語圏など世界の他の言語圏と比した「フランス語圏」の特徴について述べられている。ここで導き出される小括として、フランス語圏諸国における実際のフランス語話者、すなわちフランコフォンは圧倒的でない、ということである。英語圏諸国なら英語話者が圧倒的で、ケベックを抱えるカナダが唯一の例外であり、スペイン語圏やポルトガル語圏諸国を見ても、バスク語やカタルーニャ語、あるいは南米には先住民諸言語を普段用いる住民がいても、彼らはスペイン語、ポルトガル語話者でもあって、結果としてイspanoフォン（スペイン語話者）やルゾフォン（ポルトガル語話者）が圧倒的となる。アラビア語圏についても、マグレブのようにフランス語との2言語話者を抱える諸国はあるものの、非アラビア語話者はほとんどいない。これに対して、フランス語圏諸国におけるフランコフォンは当該諸国全人口の半分にも満たない¹。フランス語圏諸国でフランコフォンは少数派なのである。また鳥羽は、第1言語、すなわち日常もっともよく使用する言語としてフランス語を用いるフランコフォンの総人口は7000万人にも満たず、「日本語やジャワ語などよりも話者数が少ない(p.9)」と指摘する。

第1章におけるこの指摘は、フランス語圏／フランコフォニーを理解するうえで不可避な事項である。このことはフランス語圏が必然的に他の言語圏や他の諸言語との共存を強いられることになるからであり、フランコフォニーの中核的理念ともいえ、本書のタイトルにもなっている（言語・文化的多様性(*diversité*)について考察せざるをえないからである。事実、フランス語圏は他言語圏と重層の関係にある。カナダはフランス語圏と英語圏、ベルギーはフランス語圏とオランダ語圏、スイスはフランス語圏、ドイツ語圏、イタリア語圏、マグレブ諸国ではフランス語圏とアラビア語圏と重なっている。さらに国内に少数言語を抱えることが多い（カナダの先住民諸語、ベルギーのドイツ語、スイスのロマンシュ語、マグレブ諸国のベルベル語等）、これはたとえば英語圏とドイツ語圏、アラビア語圏とポルトガル語圏、中国語圏とスペイン語圏が重複しないのと同対照的と言える。すなわち第1章はフランス語圏／フランコフォニーと多様性との関係が導出される重要な個所である。

言語に関するデータも詳細に掲載されているが、「第 1 言語」、「第 2 言語」についての注釈あるいは説明が必要に思われた。例えば評者自身は、第 1 言語が日本語であることに何ら疑う余地はないが、「第 2 言語」は「ない」と答えるのが正確である。しかし、「第 2 言語」を「外国語」や「第 2 外国語」などと勘違いするケースが多い。外国語、特に留学で学んだり、あるいは教育機関で外国語科目として学んだ言語が「第 2 言語」とは言えない。確かに中学校から 8 年間英語を、さらにそれ以上の期間フランス語を勉強し、留学もしているが、評者にとって「第 2 言語」は英語でもフランス語でもない。では、どういうケースが「第 2 言語」なのか、説明する必要があるのではないか。そうすれば 9 ページのフランス語話者数が「少なく見積もっても 2 億 2,000 万人」という数字が生きてくるように思われた。

第 2 章「フランス語の地位の揺らぎ——フランス語 VS 英語？」は、国際組織における英語のプレゼンスの圧倒性について言及したものである。国連機関をはじめとし、アフリカ、中南米、欧州など大陸単位での国際組織における英語とフランス語、さらにスペイン語やポルトガル語、アラビア語などの主要言語の近年における使用頻度を比較した上で、多言語を公用語としている国連などの国際機関はもとより、英語圏諸国が少数派もしくは 1 ケ国も含まれない超国家組織や国際組織においても英語の圧倒性は揺るぎがなく、一方で、フランス語圏諸国を多く含むアフリカやアラブ諸国の国際組織でもフランス語より英語がよく使われるという危機的状況を明らかにしている。

第 3 章では「フランス語圏」と「フランコフォニー」の差異について、その語源の歴史的な推移も含めて考察している。日本では両者は同じものとして扱われるが、同じものではないというのが筆者の主張であり、この点では評者も全く同意見である。フランス語では「フランス語圏」は *francophonie*、「フランコフォニー」は *Francophonie* と頭文字の大小によって区別することだが、単に表記だけではないということと、*francophonie* 自体が比較的新しい概念で、フランスでは今でもなお一般になじみの薄い語彙であるということだ。ここで、書いてほしかったのが、カナダ、とくにケベックと他のフランス系カナダ人との間における *francophonie* という解釈の違いについてである。フランスでは *francophonie* はどうやら自国以外のフランス語圏諸国を総称する語として用いられているようだが、カナダでは *francophonie* あるいは *francophone* という言葉は主に自国内のフランス系を指す。英語の *French Canadians* とも違うようだが、詳細はここでは述べない。一方、ケベ

ックでは当然自らも francophone、francophonie ととらえているが、アカディアなど他のフランス系カナダ人は「ケベック以外」のフランス系カナダ人の総称として francophonie あるいは francophone ととらえている。フランス語圏／フランコフォニーは極めて複雑多岐な語であり、フランスだけではなく、カナダやベルギーなど他のフランス語圏諸国での用いられ方をつぶさに見る必要があるだろう。

第4章「国際組織としてのフランコフォニー」は、いよいよ本題ともいえるべき、国際組織フランコフォニーの成立過程および現在の組織形態や主たる活動内容に充てられている。フランコフォニーの成立過程は、1880年に francophonie の語を初めて使用したとされるフランスの地理学者ルクリュの概念から、フランス植民地帝国崩壊の1960年を前後とするサンゴール、ブルギバ、ディオリらのいわゆる「フランコフォニー運動」について紹介がなされ、60年代後半の組織の具体化、さらに80年代のサミット発足と、90年代後半以降の現組織「フランコフォニー国際組織(OIF)」への改組、発展まで言及されている。

現在の組織形態およびOIFの活動および予算についても詳述されている。ただ、この章はフランコフォニー国際組織の「紹介」という色彩が強く、このような組織形態や活動のありかたをどのように分析するのか、という論点があまり見られないのは残念な気がする。フランコフォニー研究は萌芽の状態であり、組織や活動の紹介に焦点が置かれるのは致し方がないのかもしれないが、やはり何らかの分析は必要に思われる。

まず考えられるのは、OIFに代表されるフランコフォニー国際組織は、「もうひとつの国連」という性格が色濃い。それは、予算や活動形態を見ても、フランコフォニーはフランス語の教育や普及を主たる活動や理念とはしていない。それよりも平和・民主化・人権の推進、教育・研修・高等教育・研究の発展、連帯・持続可能な開発・協力の推進といった国連が掲げる分野に重点が置かれている、という点だ。そして、事務総長や常任理事会など重要決定機関については国連に類似または同じ名称の下部組織を内包していることも「もうひとつの国連」と考えられる根拠である。

では、なぜ、フランコフォニーが「もうひとつの国連」なのか？それは、OIFの初代事務総長プトロス＝ガリの影響による。周知の通り、プトロス＝ガリはエジプト生まれのコプト教徒で、パリ大学にて法学博士を取得し、エジプト外相を経て、国連事務総長(1991-1996年)を務めている。その直後、

1997年に発足したOIFの初代事務総長を2002年まで務めた。だが、ブトロス＝ガリは国連事務総長を1期5年しか務めなかった²。紛争や貧困の事前抑止への国連の積極的関与を求めた「平和へのアジェンダ」など当時の国連外交の新展開を築いたにも関わらず、米国の反対で再選を阻まれた。彼がOIF事務総長職に就くのがこの直後であり、フランスの求めによるものであったが、ブトロス＝ガリはその就任条件としてOIFの国連型組織への改組と「平和へのアジェンダ」の理念をフランコフォニーの政策に取り入れることをあげたのである³。

一言でいえば、現在のOIFはブトロス＝ガリが国連事務総長で果たし得なかったことを果たそうとする「代替物」、と見るべきである。ただしフランコフォニーは国連とは違い平和維持軍などの武力を持たず、常任理事国を持たない。この点で、フランコフォニーが理念に掲げるフランス語圏アフリカ諸国の「平和、民主化、人権の推進」において、本来この問題に対処すべき国連やアフリカ連合(AU)などの活動と重複しないか気になるところだが、どのように調整しているのかについては触れられていない。一方、本書ではOIFと他の言語圏や国連諸機関との関係については触れられており、国連の決定や政策において国民国家ではない地域的国際組織の重要性が増していることがうかがえる。

さらにこの章の著者の数少ない分析がはっきりと表れている個所として、東欧諸国やポルトガル語圏諸国のフランコフォニー参加の背景と理由である。東欧諸国はオブザーバーがほとんどだが、旧ソビエト連邦諸国も含め、ほぼすべての国がOIFに参加し、全加盟・参加国の3分の1に達している重要なアクターである。だが、ルーマニアなどをのぞき、フランス語が使用されているとは言えない(オブザーバーがほとんどである理由はこれによる)。しかしなぜ、東欧諸国がフランコフォニーに参加するのか深い分析がなされている。

第5章「フランス語とフランス」では、フランコフォニーとフランスとの関わりと、フランス共和国の「地域語」に対する姿勢について述べられている。一言でいえば、フランスの共和主義を問う章である。フランコフォニーについて論じることは、フランス共和主義の在り方についても論じなくてはならないことの証左であろう。これはフランコフォニーの主要アクターであるカナダのマルチカルチャリズム、ケベックのインターカルチャリズムについても考察が必要であることを物語る。フランコフォニーの理念とフランス

の共和主義は必ずしも合致しないという指摘は非常に重要であるが、やや難を感じたのがド=ゴールのフランコフォニーに対する姿勢についての部分だ。国際関係論や国際政治論からみると、ド=ゴールは積極的外交路線、特にアフリカなどの第三世界との積極外交論者、と位置付けられている⁴。この観点からみると、ド=ゴールがフランコフォニーには積極的ではなかったという筆者の主張は興味を惹くのだが、それを裏付ける資料が乏しい。つまり、アフリカの政治家やフランスの他の外交関係者による「ド=ゴール評」に留まっていて、本人の回想録や議事録による裏付けがないところが、説得力に欠けるように思われる。

第6章はフランス語圏西アフリカ諸国におけるフランス語使用の状況について、教育やメディアを事例に、特に現地語との併用状況について、いくつかの国の実情と、数人の関係者の発言を取り上げて分析を加えている。フランコフォニー研究において特定地域におけるフランス語と他言語との使用状況を比較することは不可欠であり、西アフリカというほとんど取り上げられない地域を事例にしていることは興味に値する。欲を言えば、かかる調査はやはり筆者自身が行うべきであろう（他人の調査データ、しかも1つだけのデータではその内容の信憑性としてはやや難がある）。評者はフランス領のレユニオン島を含めると8カ国アフリカ諸国を訪問しているが、フランス語の使用状況は実にさまざまである。対フランスの姿勢や統合など国内事情だけでは説明ができないように思われる。

第7章はいわゆる「フランコフォニー文学」の虚構性あるいは欺瞞性を明らかにした章である。文学という観点からフランコフォニーの在り方を問う章であるが、この章と他の章との関係がつかみにくかった。ただし、フランコフォニーが文学やフランス語普及（教育）の問題というより、国際的な多様性の問題であるということが読み取れる。

以上総括すれば、本書は全般的にフランス語圏／フランコフォニーの紹介という位置づけが主で、分析的観点がやや物足りないが、言語的多様性をキーワードに、フランコフォニーの存立がフランス語の世界的伝播、あるいは防衛であるというフランス共和主義とは異なる論理に立脚していることを明示し、その意味でフランコフォニー「理解」の域に達していると言えよう。

最後に今後フランコフォニー研究においてケベックはどのような領域で不可欠であるのか記しておきたい。1つは、ケベック内外のキーパーソンについての言動あるいは思想である。『ラ・プレス』紙等のジャーナリストだっ

たジャン＝マルク・レジェ、60年代に州首相となったダニエル・ジョンソン、そして彼らと60年代に激しく対立したカナダ首相ピエール・トリュドー、さらに先述のサンゴール、ディオリ、ブルギバラアフリカのリーダーたちが60年代にフランコフォニーをめぐってフランスとカナダが対立関係にあった時に、ケベックについてどのように考えていたのか明らかにする必要があるだろう。もう1つは、ケベックと他の北米フランコフォン（アカディアやルイジアナ等）との関わりである。ハイチなどアンティル諸島とケベックの関わりについては少しずつ研究されているが、他の北米フランコフォンとの関わりについても研究が進むことを切に願うところである。

(はせがわ ひでき 横浜国立大学准教授)

注

- 1 本書9ページ「2006年当時、フランコフォニー国際組織加盟メンバーの総人口は約7億1,000万人であったが、(中略)フランス語話者の総数は1億7,500万人程度に留まる」の記述に従った。
- 2 国連事務総長は2期10年務めるのが暗黙の了解事項である。ブトロス＝ガリの前任のデクエヤル、後任のアナンは2期10年事務総長を務めた。
- 3 Boutros Boutros-Ghali, *En attendant la prochaine lune... : Carnets 1997-2002*, Fayard, 2004.
- 4 例えばカナダ外交を専門とする櫻田によって、ド＝ゴールはフランコフォニー(当該文献では「仏語圏」と表記されている)積極論者、ケベックの外交権賛成派と位置付けられ、同じくフランコフォニーに積極的だが、ケベックの外交権を真っ向から否定するトリュドー首相と激しく対立したことが論じられている(櫻田大造『カナダ外交政策論の研究——トルドー期を中心に』彩流社1999年、pp.425-435)。